

近世文字史料を活用する歴史学習の試み
—『商売往来絵字引』を用いて—

千葉真由美*

(2018年8月31日受理)

Attempt of History Learning to utilize
The Early Modern Historical Materials
:using “Shoubai Ourai Ejibiki”

Mayumi CHIBA*

(Accepted August 31, 2018)

はじめに

現行の高等学校学習指導要領では、日本史および世界史共に「歴史的思考力」を培うことが求められ、その前提として「諸資料」に基づいた理解、考察が必要とされている。また、新しい学習指導要領における地理歴史科改訂の趣旨には、「資料から読み取った情報を基にして社会的事象の特色や意味などについて比較したり関連付けたり多面的・多角的に考察したりして表現する力の育成が不十分」という問題点が指摘され¹⁾、改定後の科目となる歴史総合・日本史探究・世界史探究でも、「諸資料」から歴史に関する情報を適切かつ効果的に調べたり、まとめたりする技能を身に付けることが明文化されるなど、諸資料の活用については引き続き重視されている。

諸資料を活用しての学習は、中学校社会科の歴史的分野でも重視され、小学校でも年表や遺跡など基礎的な資料に着目する学びが求められている。小中高を通じて歴史叙述の根拠となる「史資料」の理解を深めていくことは、歴史とは何かを考える上でも重要な点で、様々な資料の活用は、歴史学習における主体的な学びにつながっていくものであろう。

ところで、歴史学習において比較的活用しやすい史資料は絵や図を主としたものではないだろうか。絵や図を用いた学習は興味の対象にもなりやすく、歴史事象を考えるきっかけにもなると考えられる。しかし歴史叙述の根拠となる史資料の多くは、文字を中心とした史料である。ところが文字史料、いわゆる「古文書」そのものを歴史学習の場で活用することはなかなか難しい。特に前近代の古文書は、まず「くずし字」が解読できなければ内容の理解には到底至らない。そのくずし字を読むこと自体が容易ではないのである。近年は、古文書を利用した授業実践も紹介されている

*茨城大学教育学部日本史研究室（〒310-8512 水戸市文京2-1-1；Laboratory of Japanese History, College of Education, Ibaraki University, Mito 310-8512 Japan）.

が²⁾、古文書を歴史学習で活用するには、相当の工夫が必要となるであろう。ただ、史資料には圧倒的に文字史料の占める割合が高いことを鑑みれば、文字史料を活用した学びの検討が、今後多く求められてくることも考えられる。

そこで本稿は、絵に文字を組み合わせた教材となる、近世後期の出版本『商売往来絵字引』を事例に取り上げ、本史料を活用した歴史学習の試みとして、オープンキャンパスでの若干の実践を報告する。

1 『商売往来絵字引』について

(1) 近世の往来物と『商売往来絵字引』

本稿で取り上げる『商売往来絵字引』は、「往来物」と呼ばれる初等教育用の「教科書」の一つに位置づけられる。往来物は11世紀中頃に起源を有するといわれ³⁾、もともとは往復の消息文例集であったため往来物と呼ばれたが、その後、書簡で多く使用される単語などを集めたものを意味し、さらには文字の練習の手本となる、「手習い本」として使用されたものを意味するようになった。近世、特に江戸時代では、江戸など都市の発展と共に出版文化が隆盛して多くの本が出版され、また全国各地に寺子屋が普及したこともあって、民衆世界にまで往来物が広く流布した。そのなかでも多く売れたとされる往来物が『商売往来』である⁴⁾。

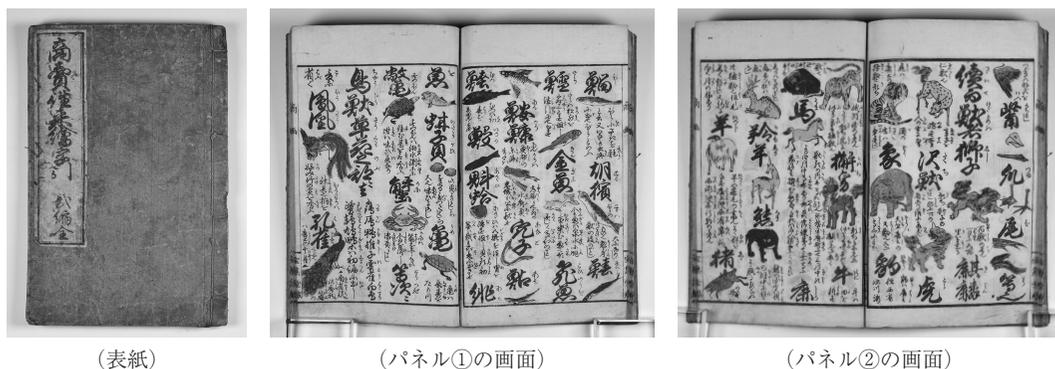
『商売往来』は、元禄7年（1694）に大坂の高屋平右衛門によって刊行され、商取引に関する帳面類、貨幣、衣料、食品など多種多様な語彙が掲載された⁵⁾。商人の子弟が覚えるべきとされた文字の手引書ではあるが、商人だけではなく村の教育でも広く学ばれた。当時の読み書きの入門教材の基礎と位置付けられていたようで、「名がしら（名頭）と江戸方角と村の名と商売往来これてたく山（沢山）」という川柳が知られるほどであった⁶⁾。姓の頭の字を列記した『名頭』、江戸の地名や町名を列記した『江戸方角』、周辺の村名、そして『商売往来』は必須の学習教材とされていたのである。特に『商売往来』は、多くの類書が出されたことでも知られる。例えば、商業活動に必要な語彙のみを集めた寛政3年（1791）刊『商売用字尽』、特定の業種を対象とした明和3年（1766）刊『問屋往来』などがあり、明治期には『世界商売往来』（明治4年）、『万国新商売往来』（明治5年）なども刊行されている⁷⁾。

本稿で取り上げる『商売往来絵字引』も類書の一つである。『商売往来』に掲載された各語彙に、絵と簡単な説明を入れたもので、学習者の語彙理解に役立ったものであろう。それは『商売往来絵字引』の初編となる『商売往来絵字引全』（以下『初編』とする）の後、続編として『商売往来絵字引式編全』（以下『式編』とする）が刊行されたことにも示されている。当時好評であったことが推察されよう。文政末～嘉永頃の成立と推定される『初編』⁸⁾のうち、挟川半水の誌が掲載された版の冒頭に「書は言語の形を顕し、画は万像の自在を写し、書画これ両輪の如くにして」（読点は筆者、以下同）とある。書と画、すなわち文字と絵があつての学びの有用性を説いているのである⁹⁾。

なお、元治元年（1864）の序文がある『式編』の冒頭には「凡初編ニ不至諸国之名物必用之文字、猶嗣遺漏和漢之産物」と、『初編』に記載しきれなかった諸国の名物で必要なものがあるとしている。『式編』は特に地域の特産物について詳しく載せている点が特徴といえる。

(2) 学習教材としての『商売往来絵字引』

今回、教材とした史料は筆者所蔵の『式編』である(図1)。見開きでおおよそ縦18cm×横20cm(表紙は縦18cm×横12cm)で、江戸時代の版本の中では小型のものである。



(表紙)

(パネル①の画面)

(パネル②の画面)

図1 『商売往来絵字引式編全』

『式編』の教材化にあたっては、文字を読むことを重視し、制作会社に拡大パネルの制作を依頼した。おおよそ縦29cm×横32cmに拡大した、2つのパネルである(パネル①・②)。

パネル①は、魚類のうち鰯から孔雀までが掲載された部分である。特に「鮫鱈」が掲載されていることから選んだもので、「あんかうハ、奥州の東海またハ常州にて取る、水府奥岩城方公に献ず」、すなわち「鮫鱈は、奥州の東の海または常陸国で取れる。水戸の奥、岩城(磐城)から献上されている。」という説明が書かれている。鮫鱈は、現在の茨城県でも水揚げ量は多く、冬の味覚の代表としても知られているが、江戸時代でも、鮫鱈といえば常陸国が知られていたのである。後述するように、地域での歴史学習を想定すれば、説明文にある「常州」「水府」の語句を用いながら、地域の理解を深める題材として扱うことも可能であろう。

パネル②は、主に獣の獅子から猪までが掲載された部分である。動物を題材とすることで、親しみやすく、また絵から文字を類推することが比較的可能であると考えられるため選んだものである。江戸時代の人々が知り得ていた獣類ということになろうが、「麒麟」「獅子」など空想上の動物と、実在の動物を区別することなく掲載している点など、当時の人々の獣類に対する感覚を示すものとしても興味深い。

この2つのパネルを用いて、江戸時代の「教科書」の一端を知る、いくつかのくずし字を読んでみる、書かれた説明の内容から当時の社会を知る、といった展開での学習を想定した。

2 オープンキャンパスでの実践

(1) 2つの実践

2018年7月28日(土)の茨城大学オープンキャンパス(於:水戸キャンパス)において、『式編』を用いた学習を実践した。社会科学教育教室では「社会選修ってこんなところ—学部4年間の紹介と

相談コーナー」として、教室の紹介企画を実施した。この中に日本史ゼミ紹介コーナーを設け、「歴史史料の理解を通じて歴史を学ぶ」、そして「学んだ知識を学校での歴史教育に活かすことができる教員を目指す」という考え方を土台に、来場者（主に高校生が対象）に「くずし字」の解説を体験してもらうこととした。

実践者は、大賀洋希（大学院2年次生）、神永ゆめ・川又遼平・菊池彩純・篠原彩里・関沙耶香・平山稜（以上、学部4年次生）の合計7名である。彼らは学部2年次から、筆者が定期的で開催している古文書解説講座等でくずし字を学んだり、県内外の古文書調査、整理を経験している。また本学図書館主催の講座「土曜アカデミー」で定期的で開催している、初心者向けの古文書解説講座「古文書寺子屋」では、市民を中心とした参加者にくずし字の解説をするなどの経験を積んできた。そこで、オープンキャンパスでの実践は、7名の具体的なアイデアを中心とした。自身がくずし字を苦労して学んだ経験から、高校生が興味を持つことができる方法を考えてもらった形である。その結果、以下のⅠ、Ⅱが提案された。

Ⅰ. 絵合わせ（発案及び製作：神永ゆめ・篠原彩里）

パネル①から「鱉」^{たら}「飛魚」^{とびのうを}「魁蛤」^{あかひ}「亀」^{かめ}「蟹」^{かに}を「魚類カード」として、パネル②から「獅子」^{しし}「麒麟」^{きりん}「馬」^{うま}「熊」^{くま}「猪」^{しし}を「獣カード」として、約10cm×6cmのラミネートカードを作る（図2）。さらに、かな文字を示したA4サイズの「魚類シート」と「獣シート」を作る（図3）。実践は、各シートの枠にラミネートカードを当てはめていく「絵合わせ」である。

「絵合わせ」は文字だけでは想像がつかない場合でも、魚類や獣類の絵と照合しながら、クイズ感覚でくずし字を解いていくことが想定されている。文字に慣れ、親しむことを目的とした、くずし字学習の導入としても有効な素材と考える。

まず、平仮名とほぼ同じに見えるくずし字がシートに書かれている場合、選択肢となるカードを合わせることで、正解に近づくことが可能となる。次に、漢字を想起して解くことが可能となるものがある。例えば獣シートのうち「きりん」の「り」が「里」であること、同シートの「し、」の「し」が「志」であることが想起できれば、正解へと導くことができるだろう。



図2 魚類カード（左）と獣カード（右）

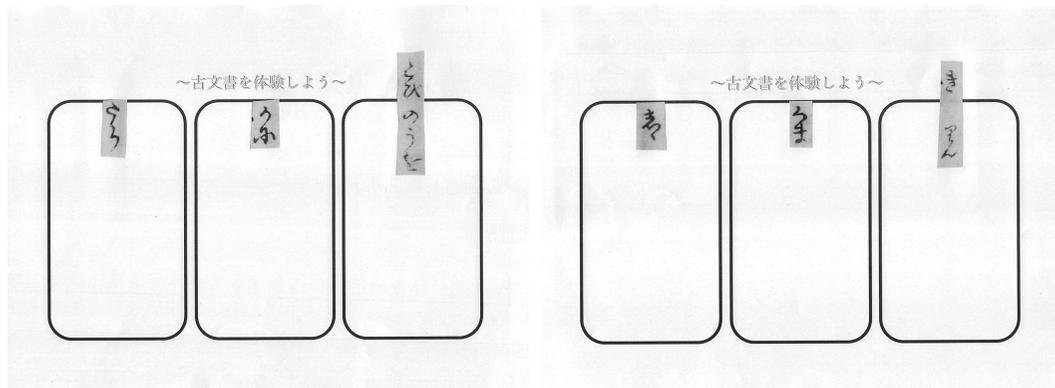


図3 魚類シート (左) と獣シート (右)

II. 文字の穴埋め (発案及び製作：川又遼平・平山稜)

「総合わせ」の後、より詳しく文章を読みながら、くずし字解読に挑戦するものである。パネル①・②を利用しながらの解読となる。すべての文字を解読することは難しいため、穴埋め形式の問題用紙を作成する(図4)。問1はパネル②から「象」を、問2はパネル①から「鮫鱈」を取り上げ、各説明文を考えるものである。

問題用紙には、解読のためのヒントも書かれている。問1の象を解く際は、漢字に付されたよみがなを読むこと、象は体が大きいこと、象が住む山の様子、これらの点をヒントとして文字を考えることになる。問2は、鮫鱈が獲れる主要な地域として、茨城県や福島県などの身近な地名が当てはまることを知るなど、現代にもつながる地域の特産物を理解するものである。くずし字は前後の文字や文章の流れで解読できる場合も多い。またくずし字の解読と共に、説明文を読むことで、歴史事象への深い学習も可能な教材となっている。

問1・2共に、穴埋めには漢字が入るため、問1のうち「天竺」「獣」「大」、問2のうち「岩城」「猷」など、漢字を思い描くことができれば、解読は可能かもしれない。その一方でくずしが激しく、漢字が想起できない文字については、同じ文字が登場することに注目して、正解へ導くことも可能である。問2では「奥州」の後に「常州」とあり、連続して「州」が登場している。

なお、オープンキャンパス当日は、実践者7名が時間交替で担当するため、共通理解のための解説用紙も作成している。特に注意してほしい変体仮名、地名を考えるにあたっては地図を利用すること、現代の事象への理解につなげられるよう、「アンコウ鍋」などに触れながらの学びを意識することなど、複数の担当者が共有できるように配慮している。



古文書を読んでみよう！

問一 象

ぞうハ

唐土の
 大也 山

山尔春む

問二 鯨鯨

あんかうハ

の

東海
またハ

にて取る

水府奥

方公尔 春

右のひらがなを読めると
答えに近づくよ。
象がどんな生物かを想像
して考えてみよう。

山のところには、どんな
山かを説明する漢字が
入るよ。

問二のひんとし

鯨鯨がどんな地域に生息
していたかを考えてみよう。
七行目の には、
今もあんこう鍋で有名な
地名が入るよ。

「公」とは何を示しているん
だろう。

図4 「象」(上段右), 「鯨鯨」(上段左), 問題用紙 (下段)

(2) 当日の様子

当日の開始時刻は9時30分、その後14時30分までの約5時間の活動であった。社会科教育教室の来場者が約120名で、うち約40名が日本史ゼミ紹介コーナーに来場し、くずし字解読を行った。もともと社会科あるいは日本史に興味がある来場者も多く、保護者と共に解読に挑戦する姿もみられた。最初は戸惑っていたが、解読を始めるとじっくり時間を使って読んでいくようになり、来場者が多くなったために急遽、机とイスを増設して対応にあたることになった。

絶え間なく来場者が滞在する状況が続き、会場内の雰囲気も良かったため、実践には手ごたえがあったように思われる。実践担当者による終了後の感想と反省点等は、以下の通りである。



図5 当日の様子

○高校生や保護者の方に古文書読解を体験していただいた。相談しながらも回答できる様子が多く見られたため、難易度は適当なものであったと考える。

動物絵合わせに対しては、全体的に興味をもって取り組む高校生の姿が多く見られた。担当者側のサポートもあり、絵と名前を合致させることができていた。担当者側では、文字を読むためのヒントをどのように出すかが難しい部分があったと考える。ただ答えを教えないようにサポートすることが難しいと感じた。文章読解に対しては、細かい字に苦戦しつつも多くの高校生が読むことができた。担当者側もあらかじめ準備していた解説やヒントを活用してサポートすることができた。古文書読解体験に入る前の導入として、また授業紹介コーナーを活用することで、古文書を勉強する意味などの理解を促すことができた。

事前に、小型のホワイトボードを準備するべきだったことが、反省点として挙げられる。くずし字の変化の解説やヒントを出す際に、ホワイトボードに書くことができると説明がしやすくなったためである。高校生側も書いてみることで字を推測しやすくなっていたので、担当者・高校生両方に書けるものがあるとよかったと考える。

歴史分野を暗記科目と感じている高校生は、普段とは違う歴史の勉強に新鮮さを感じ興味をもって取り組んでいたようであり、歴史分野が好きな高校生は、古文書という今まで知らなかった歴史の側面に触れたことで戸惑いながらも、考えながら学習することに興味をもっていただようである。また、高校で地理や世界史などを選択している高校生は、日本史はよくわからないと言いつつも友

人と協力しながら古文書に取り組んでいた。

このように、読解体験をした高校生の多くは、くずし字に戸惑いつつも興味をもちながら活動していた。担当者が真剣に丁寧な対応を行っていたことで、高校生側も頑張っただけで回答しようとする姿を見ることができたように思う。（大賀洋希）

○社会科に興味をもち、5階まで足を運ぶ高校生が多くみられたため、体験スペースをもっと広くとり、人員を増員する必要があると感じた。古文書読解に関しては、積極的に体験してみようという高校生が多くみられた。高校生は、見慣れない文字に戸惑いながらも、担当のサポートを得ながら読解を進めていた。その過程では、驚きを感じつつも楽しみながら読解を進められていたように思う。そのため、使用した教材や難易度は適切なものであったと思う。反省点としては、ホワイトボードなどを用意して、どのようなくずしになっているのかを示せるようにしたほうがよいと感じた。また、担当者側で事前に情報を共有し、商売往来に関する理解を深めたいうえで臨むことができればよかったと思う。（神永ゆめ）

○人によってまちまちではあったが、古文書に興味を持っている高校生もいた。準備物として小さいボードがあると良かったと思う。また準備担当外も対応することになったので、各担当の準備物については、事前に相互理解ができると良かった。楽しかった。（川又遼平）

○最初から演習（古文書）に取り掛かるよりも、どこから来たか、学年など簡単な会話をしてから演習に取り掛かると抵抗も少なくすんなり移ることができた。日本史に興味がなくとも、実際にパネルを見るとやりたいと言ってくれた。笑顔で私たちが楽しそうにやるのが大切なのだと感じた。（菊池彩純）

○興味を持って質問してくれる人が非常に多かった。古文書のことだけではなく、社会選修についてや日本史ゼミに興味を持って質問してくれる方も大勢いた。

商売往来の内容をもっときちんと理解した上で、みんなと知識を共有するべきであった。クイズや問題として出していない部分にも興味を持ってくれる人もたくさんいたので、自分の担当以外のところもきちんと読めるようにしておきたかった。

絵合わせの問題を二問出すだけでそれなりに時間を使ってしまい、文章の穴埋め問題まで到達せずにお帰りになる方が多かったので、問題の内容は少なめでもいいと思った。（篠原彩里）

○古文書を読むことに対して、「難しい」「大変そう」というイメージがあったようで、始めは苦戦していたが、ポイントをつかむことで何となくでも読めるようになっていった。高校生は、難しいけど読めると達成感を味わうことができ、古文書を読むことの楽しさに気付いていったように感じた。

準備については、もう少し早めに進めておくべきだったと反省している。古文書を読む活動においては、事前に教える側同士での情報の共有が必要だと考える。指導のポイントなどを打ち合わせすることで指導のムラがなくなるのではないかと考える。（関沙耶香）

○来場した高校生は、「高校の日本史のイメージと違う」「楽しそう」などの反応をしてくれた。今回の資料等は来年以降も活用できると思う。高校生が楽しく古文書を学べるようにという企画や、扱った史料の選択も適切だったと思う。今後もしっかり引き継いで続けていくことで、より良くなっていくと思う。良い経験になった。(平山稜)

(3) 実践の成果と課題

実践を総括すると、教材の内容や難易度は適当で、来場者からも概ね良い反応を得ることができたといえる。また「Ⅰ. 絵合わせ」については高校生対象とは限らずに、中学校あるいは小学校でも活用可能なものと考えている。「Ⅱ. 文字の穴埋め」も同様で、よりわかりやすい文字等を選ぶことによる幅広い活用も想定できるだろう。くずし字理解の導入学習として、有意義な実践であったと考える。

一方で、解読する文字やカードの題材について、十分な時間をかけて精査する必要があることができたこと、説明の仕方も検討を要する事項があったことなどが課題としてあげられる。例えば「Ⅰ. 絵合わせ」の「獣シート」でいえば、「くま」は「うま」にも見え、文字の形のみではどちらか判断がつきにくい。これを想定した上で、カードは「熊」と「馬」の両方を用意しているが、当該のくずし字のみに着目すれば、「馬」は完全な誤りとは言えないだろう。本題材の「くま」の「く」は、「久」の変体仮名であることを説明して、正解へ導くものである。くずし字に類似のものがある際は、全く別の漢字であっても似通ったくずしになる場合がある、といった知識や説明が必要となる。くずし字の解読は文章の前後関係で判断する場合も多い。紛らわしいくずし字を扱う際には、正確な説明が可能であるかを検討しなければならないだろう。

また「獣シート」の「しゝ」について、『忒編』では「獅子」は「志し」、「猪」は「志ゝ」の読み仮名が付されている。同書内で異なる表記にしている理由は不明であるが、共に「しし」であるため両方正解となる。さらに現在では、「猪」は「いのしし」と呼ぶ方が馴染み深いと考えられるため、題材とする際には呼び名の説明なども必要であろう。

「Ⅱ. 文字の穴埋め」については、茨城県にとって身近な地域の題材ではあるが、「奥州」「常州」といった語句は高校生には聞き慣れないかもしれない。「常陸国」を例とすれば、「常」「州」が何を指すものであるかなどの補足を要する。解読時における説明の仕方、順序等については、担当者間での理解を深めておく必要もあっただろう。

今回の実践は、企画の発案から実践に至るまでの時間に余裕がなかったが、今後は上記の課題を活かしながら、より適切な教材に作り上げていくことができると考える。

3 近世文字史料と歴史学習

(1) 融合的な学習の題材として

絵入りの文字史料を活用することで、くずし字理解の導入学習が可能であると考えられるが、さらにくずし字の中でも「変体仮名」を取り上げることで、かなの成り立ちや漢字そのものの理解にもつなげられる点を指摘したい。

例えば「Ⅰ. 絵合わせ」のうち「たら」は「多良」と書かれている。変体仮名は音訓の表音文字

であることを示し、「た」「ら」に当てはまる漢字を考えるものである。史料に記されている「た」はどの漢字だろうか、といった問いかけが想定される。また「Ⅱ. 文字の穴埋め」では、変体仮名の「尔」＝「に」、 「春」＝「す」が繰り返し使われている部分に着目できる。「春」は鮫鱈の説明の中で、濁点を付したのものもある。「春」を「す」と読むなどは、現代人の感覚からいえば難しいかもしれないが、これも漢字の音訓の理解へつなげられるのではないだろうか。変体仮名に注目することで、文字の成り立ちや漢字そのものへの理解に結びつける、さらには歴史学習と国語学習とをつなぐような、教科の融合的な学習が可能になることも考えられよう。

多くの高等学校日本史教科書では、古代の国風文化の項目で、当該期の文化の象徴として「かな文字」を取り上げている。例えば「すでに9世紀には、万葉がな草書体を簡略化した平がなや、漢字の一部をとった片かなが表音文字として用いられていたが、それらの字形は、11世紀の初めにはほぼ一定し、広く使用されるようになった。その結果、人びとの感情や感覚を、日本語で生き生きと伝えることが可能になり、多くの文学作品が生まれた。」とあるように¹⁰⁾、かなの成り立ちは平安期の文化の特質、その後の文化形成とのつながりで、歴史の大きな流れの中でも理解すべき事柄である。また日本で平がな、片かな、漢字の3種を併用する点は、特有の言語文化として注目できるであろう。

変体仮名については明治33年（1900）の小学校令施行規則改正以後、学校教育では用いられなくなり、また昭和23年（1948）の戸籍法施行によって、戸籍上の人名にも用いられなくなった。しかし、現在も商店の看板に見られることがあるなど、現代人にとって全く過去の事象ではなく、身近な事例を見つけることも可能である。くずし字学習は、歴史事象が現代につながっていることを具体的に理解できる題材であろう。

（2）地域の歴史学習の題材として

『商売往来絵字引』の内容を扱うことで、近世社会で広く知られていた地域の特産物の理解、そして身近な地域への理解につなげられる点も指摘したい。

『商売往来絵字引』には、茨城県域にかかわる特産物がいくつか掲載されている。『初編』には、「紙」の項目に「紙ハ和漢色々、もつとも美濃紙、西の内、半紙、其外種類多し」とあり、水戸藩の特産物となっていた西ノ内紙に触れている。宝暦4年（1754）刊行『日本山海名物図会』には「凡日本より紙おおく出の中に、越前奉書、美濃のなおい、関東の西ノ内、程村、長門の岩国半紙もつとも上品也¹¹⁾、ずなわち全国の紙の中でも、越前奉書・美濃紙、関東では西ノ内紙・程村紙、そして長門の岩国半紙が最も上品である、と紹介されている。西ノ内紙は全国的にも上質な紙として知られていたのである。

さらに『弍編』には、前述の「鮫鱈」以外にも以下の産物が掲載されている。

- ・海気かいき：かいきハ地生至て細なるもの也、色五色あり、当時常州より出るも有
- ・黒八條くろはちでう：これハ多く武州八王子辺を吉とす、常州よりも出る、その丈六丈ほど
- ・結城紬ゆきつむぎ：これハ結城方織出す紬也、至極上品なり、大方縞也

いずれも絹織物である。「海気」は甲斐絹ともいわれる絹織物で、その名が示すように主産地は甲斐国郡内（現山梨県都留郡）が主産地であった。『弍編』によれば、布地が細く色は五種あり、常陸国から生産されるものもあるという。また、「黒八條（丈）」は多くは武蔵国多摩郡八王子（現

東京都八王子市)辺りが良いものとされているが、常陸国でも生産されているとある。そして結城(現茨城県結城市)から生産される「結城紬」である。こちらは「至極上品」であり、ほとんどが縞柄であるという。

当時「上品」などとして知られていた産物が、身近な地域の特産物であったことは、現在の特産物や産業との関わりを考えるきっかけにもなるだろう。さらにいえば、『商売往来絵字引』を通して近世社会の初等教育のあり方、出版文化のあり方への理解にもつなげていくことができるのではないか。

おわりに

本稿は、くずし字解読を導入素材として近世の文字史料を活用する、歴史学習の実践報告である。オープンキャンパスという限定的な場面ではあったが、一定の成果を得ることができたと考える。歴史史料において多くの割合を占める、古文書などの文字史料の活用が難しい現状で、扱うくずし字の精査や解説方法のさらなる検討が必要であるものの、文字と絵を組み合わせた近世後期の出版本『商売往来絵字引』を活用できること、そして、くずし字学習が教科の融合的な学習につながる可能性についても指摘できた。

『商売往来絵字引』自体は、近世の社会や文化にかかわる史料であるが、各地域の独自の歴史や産業にも注目ができると同時に、全体史のなかでの経済、文化、教育といった分野にもつなげることが可能な題材である。人物史や事件史とはまた異なる、歴史事象への深い理解にもつなげることができる題材であろう。

なお本稿で取り上げた実践では、当該の教材を用いた学習者の反応を知ることが主眼であったため、史料を解読した上でいかなる理解につながられるかについては指摘したにとどまっている。また実践での来場者は、もともとある程度歴史に興味を持っていたと想定されるため、取り組みへの意欲を含めた評価については限定的であるかもしれない。文字史料を活用した学習として、授業計画を含めた全体的な組立でも考える必要がある。

文字史料を用いる歴史学習に向けた検討や実践はこれからも必要であると考えている。今後の課題としたい。

注

- 1) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』2018年7月。
- 2) 例えば、高橋朝彦「秀吉の『禁制』から戦乱期の社会を考察する」(永松靖典編『歴史的思考力を育てる—歴史学習のアクティブ・ラーニング—』(山川出版社, 2017年)など。
- 3) 石川松太郎『往来物の成立と展開』(雄松堂出版, 1988年)。
- 4) 八楯友広「往来物—津々浦々の読み書き教材」(歴史科学協議会, 鶴飼政志ほか編『歴史をよむ』, 東京大学出版会, 2004年)。
- 5) 『商売往来』の所収語彙については、前掲注3)石川氏著書において、(1)商取引に関する記録文字等、(2)貨幣名、(3)商品に関するもの、(4)商人生活の心得に関するもの、に分類されている。

- 6) 乙竹岩造『日本庶民教育史』中巻（目黒書店，1929年）「寺子屋物語」.
- 7) これらのうち代表的なものは，石川松太郎編纂『日本教科書大系 往来偏』第12巻・第13巻，講談社，共に1968年に収録されている.
- 8) 高橋幹夫『シリーズ「江戸」博物館』3 絵で見る江戸の商い（芙蓉書房出版，1998年，高橋幹夫『江戸商売絵字引』，1995年の新装普及版）.
- 9) 挟川半水訂校『商売往来絵字引』（早稲田大学図書館古典籍データベース，文庫30-g0130）など.
- 10) 『詳説日本史B』（山川出版社，2018年）.
- 11) 寛政9年（1797）求版，平瀬徹斎藤編『日本山海名物図会』三（国立国会図書館デジタルコレクション，特1-106）.